新刊紹介

ギュンター・グラス著『わたしの一世紀』

林　睦實

1999年度ノーベル文学賞の受賞作家ギュンター・グラス（1927年，ダンツィヒ，現在のグダニスク生まれ）にとって，彼が生きてきた20世紀とはどんな時代であったのか。この物語集は受賞が決まる約三ヶ月まえに，シュタイドル社から二種類のヴァージョン，つまり自筆の水彩画を入れた大型の豪華版（416頁）と物語だけを収めた廉価版（384頁）として発売された。もちろん，本誌の紹介ではグラス自筆の水彩画をとりあげるわけにはいかないが，それぞれの水彩画にはイラスト風に，物語の各年度が描かれている。廉価版ではごく単純に数字がいわばタイトルとなり，1900年から1999年までの物語は，いわばメドレーのように，あるいは「デカメロン」か「神曲」の構成を連想させる100話集を思わせる。

第一話の「1900年」は，いきなり冒頭の導入部で，物語の語り手を「わたし」という一人称の形式で，「くる年も，くる年も現場に居合わせている，わたしの分身」であることを説明する。それは変幻自在にドイツの東西南北を飛び廻り，老若男女の姿になって出没する。けっして歴史の主人公ではないが，戦争と殺人，混乱と進歩の凄まじい矛盾に満ちた20世紀の三分の一か半分近くの物語を，空想やフィクションと体験から紡ぎだすグラスの年代記であり，かつ彼の個人史でもある。限られた紙面ではあるが，以下にこれらの問題とのかかわりで筆者にとって興味をそそる数編の物語からの抜粋を，「わたし」に語らせてみようと思う。なお，点線部分は原文からの省略を表している。

「1900年」からの抜粋

低地ババリア地方出身のわたしには，長い船旅はうんざりだった。やっと天津に着いたころは，軍隊はみんなもう到着していた。イギリス軍，アメリカ軍，ロシア軍，さらには日本の正規軍やその他の小国の軍隊もやってきていた。イギリスの軍はもともとインド人だった。われわれの部隊は初めのうち少数だったが，幸運にもクルップ社製の新式5インチ速射砲を装備していた。アメリカ軍は彼らのマキシム自動機関銃をためしていたが，これは本物の悪魔の兵器だ。こうして北京はたちまち占拠されてしまった。われわれの部隊が侵攻したときには，もう何もかも終わっていた。残念な話ではあったが。それでも，何人かの挙闘士の連中は騒ぎを起こしていた。彼らがそのように呼ばれたのは，「ダーダウフェイ」（打倒拳），つまりドイツ語では「拳で相手を叩きのめす人」を意味するからだ。だから，まずイギリス人が，それから誰もが „Boxeraufstand“，つまり「義和団の叛乱」を話題にしたのだ。義和団は外国人を憎悪していたが，この連中はいろん

な物を売りつけ，イギリス人はとくに阿片の売り込みに如才がなかった……。

秩序にしたがって，義和団は地安門広場に集合させられた。ここは，満州市とふつうの北京地域をへだてる壁の真ん前であった。彼らの弁髪はどれも一蓮托生のように結びつけられていたが，その光景はおかしかった。その後，彼らは集団で銃殺されるか，あるいは一人ひとり斬首された。でも，わたしは許婚にこんな残忍な殺戮について，ひとことも手紙に書かなかった……。イギリス軍とわれわれドイツ軍は，さっさと銃殺刑に処するのが一番のお気に入りだったが，ところが日本人だけは斬首のときでも，古来の伝統にしたがった。しかし義和団は銃殺されるほうを望んだのだ。連中は斬り落とされた自分の首を小脇にかかえて，地獄をさまよい歩かねばならないと，恐怖を抱いていたからだ。それ以外の恐怖は，彼らになかった。銃殺される直前に，米の饅頭を血染めのシロップに浸して，がつがつむさぼり食っている何人かの連中を，わたしは目撃した。

1999年3月のライプツィヒ書籍見本市の会場で，グラスは新作の発表をこの血生臭い「第一話」の朗読から始めている。ブレーメン放送局主催のゲッティンゲンの朗読会でも，その後のARDや第三衛星放送の録画番組でも，彼はこの逸話の朗読をはぶかない。彼の視座には，20世紀の幕開けを象徴するよほど衝撃的な事件として，ドイツも加害者としてその鎮圧に参加する「義和団の叛乱」が映っていたのに違いない。

「1933年」からの抜粋

お昼ころ，わたしは若い同僚のベルントといっしょに軽食を取っていたときに，何気なくラジオを聴いていると，首相任命のニュースがわれわれの耳に飛び込んできた。とはいっても，わたしはびっくりしたのではない。宰相シュライヒャーの退陣後に，どう見てもあの男が登場する気配であったし，あの男だけが話題になり，高齢白髪の帝国大統領でさえ，あの男がもつ権力への意志に服従せざるをえなかったからだ。わたしは冗談めかして，こう反応しようとした。「これでペンキ屋さんが画家になって，われわれを喜ばせてくれるんじゃないかな。」ところが，ふだんは「毛の一筋も」政治に関心を示したことのないベルントは，身の危険を感じたようだった。「ここを出るんだ！　ぼくたちは脱出しなきゃだめだぞ！」

彼の過剰反応を，わたしはにやにや笑ってはいたものの，しかし同じように，憂慮すべきわたしの予感があたっているのでは，と思った。もう数ヶ月前に，わたしは今にも予想される権力奪取にそなえて，とくにうさん臭く思われそうな絵画の一部を……アムステルダムの倉庫に移管しておいたのだ。巨匠（マックス・リーバーマン）の数点の作品は，まだ画廊に残っている。そんな絵が「退廃芸術」の部類に入れられるはずがない。ただ，巨匠はユダヤ人だというだけで，危険だった……。わたしは自分にも，ベルントにも納得させようと懸命になった。「あの方はもうとっくに八十を越えているんだ。いくらなんでも，あの方に暴力を振るうなんて，あの連中はしないだろうよ。いずれは，芸術院総裁の地位から退任させられることは間違いないにしてもだ。こりゃ，なんてこと

だい。三，四ヶ月もしたら，あの化け物どもはどのみち消え失せてしまうさ」

それでも，わたしの不安は続いたし，あるいはむしろ募っていった。われわれは画廊を閉めた……。午後遅くに，外に出た。もう混雑していて，人込みの中を通り抜けることもままならない。Sバーンに乗ったほうがよかったかもしれない。あちこちから，隊列がやってくる。もうハルデンベルク通りに達している。彼らは六列縦隊を組み，ジーゲス・アレーに向かって行進していく。突撃隊の部隊がひとつ，そのあとに次の部隊のひとつが，一糸乱れず続いていく。

この年，グラスはまだ六歳になったか，ならずのころだ。彼の生まれ故郷は，1937年にドイツ領に編入される。彼は「ユング・フォルク」を経て「ヒトラー・ユーゲント」の隊員になり，やがて1944年から東部戦線に兵士として召集される運命が待ち受けていた。この話に登場する画廊には，おそらく戦後，デュッセルドルフやベルリンの美術学校で学んだころの画学生の体験がフィードバックされているにしても，例えば1977年に制作されたヨーアヒム・フェストの映像ドキュメント『ヒトラー』が見事に描き出しているように，台頭するナチの不気味な影響力を過小に評価したかったのか，それとも適切に評価しえなかった時代の雰囲気が，この「1933年」の物語からも伝わってくる。いわば，「アウシュヴィッツ体験」の負の遺産を相続する作家グラスの，強靱な想像力に支えられた回顧録と言えるのではなかろうか。

「1953年」からの抜粋

雨はやんでいた。風が巻き上がると，屋根がわらの砂ぼこりが歯の中でジャリジャリと音をたてる。これはベルリン特有の現象だ，とわれわれは聞かされた。アンナとわたしは，半年このかた，ここで暮らしていた。彼女はスイスを離れ，わたしはデュッセルドルフを後にしていた……。

われわれはSバーンに乗りレールター駅まできた。この駅の鉄製の骨組みだけは，昔のままだ。国会議事堂とブランデンブルク門のそばを通り抜けたが，門の屋上には赤旗がなかった。ポツダム広場で，われわれは西側の占領地域から，なにが起きたのかを眺めていた……。「コロンブス・ハウス」と「祖国の家」は噴煙をあげていた。キオスクのひとつが燃え上がっていた。くすぶっている煙が風に乗って広がり，炭化した政治的プロパガンダは，黒い粉雪となって大空から降ってきた。われわれは右往左往する群集を目撃したが，人民警察の姿はない。しかし群集に包囲されて，にっちもさっちも動けなくなったソ連軍の戦車がいた。T 34だ。この型式はわたしも知っていた……。われわれ二人は，境界線にそって塹壕にひそむロシア軍兵士の子どもじみた顔を眺めていた。はるか離れたところから，投石を見かけた。あらゆる場所に，石はたっぷりあった。戦車に向かって投げつける石が……。

十年後になって，アンナとわたしたち夫婦はお互いに子どもたちからせがまれて，立ち入り禁止のポツダム広場を，おまけに壁に囲まれた無人地帯をみることになった。そ

の時に，わたしは一本の戯曲を，『平民が叛乱の稽古をする』という題名のドイツ悲劇を書いたのだが，そのために東西両国のお目付け役の怒りを買うはめになった。四幕もので，権力と無力，計画ずみの革命と自然発生的な革命を取り上げたのだ。シェイクスピアを変えられるのかという問題，ノルマの引き上げ，ぼろぼろになった赤旗の端切れ，主張と反論，傲慢な人間と小心な人間，戦車と投石，雨に降られた労働者の蜂起。それが鎮圧されるか否かの時点で，六月十七日の事件は民衆の決起と歪曲されて，祝日に祭り上げられたのだ。なのに，西側ではこの祭日の休みに，交通事故死はどんどん増えつづけていた。

この有名な「ベルリン暴動」にたいするグラスの意思表示は，二重か三重の意味合いで，興味を喚起せずにはいられない。約三年まえの，「ドイツ・ラジオ放送局」とのインタビューのなかで，彼は1953年1月にベルリンへ引っ越して六ヶ月後に，ポツダム広場の無人地帯から労働者の蜂起を目撃したと語っている。彼に言わせると，東ドイツの政権側はいつもながらの公式見解にしたがって，「反革命」の一言でけりをつけたが，ところがアデナウアーの政権側は事実無根の「民衆の決起」をでっちあげた。そのことが腹立たしくてならないと，グラスはいう。実際に彼が目にした風景は，スターリン・アレーからやって来る数グループの労働者活動家集団がストライキを宣言して，フンボルト大学のそばを通りながら，教授や学生たちにも共闘を呼びかけたが，一般市民や教会はこれに同調しなかった。わずかに二，三名の人民警察官が彼らのデモに加わったけれども，その後に彼らは即決裁判で銃殺されたらしい。「孤立し，指導者もいない労働者の蜂起」がなぜ「民衆の決起」にすり替えられるのか，このように非難するグラスの異議申し立ては，本質的には東ドイツの劇作家ベルトルト・ブレヒトの問題意識と重なっている。

東ドイツの党・政府の首脳に宛てた書簡をねじ曲げられて，西側でもバッシングの対象にされたブレヒトは，もちろん東の政権側に迎合する意思なんぞさらさらなかった。晩年の『ブッコウ悲歌』に収められている10行詩「解決」は，何よりも雄弁に，あるいは辛辣にそのことを物語っている。

6月17日の蜂起のあと
作家同盟の書記はスターリン・アレーで
宣伝ビラを撒くように命じた
ビラにはいわく　人民は政府の信頼を失った
だから　せめて労働を二倍に増やすことで
信頼は取り戻せると
それならいっそ
はるかに簡単ではないか
政府が人民を解体して
別の人民を選びだすほうが

ブレヒト特有の攻撃的シニズムが，これらの詩行に隠喩となってひそんでいる。例えば「労働の倍増」は，当時のソ連から持ち込まれたスタハノフ運動による生産ノルマの引き上げを皮肉っているばかりではない。「社会主義」を詐称するスターリニズムの覇権主義が，すでに東ドイツの国家公認のスローガンであった「人民の，人民による，人民のための」権力構造を空洞化している実態さえも隠蔽されていない。「懐疑の弁証家」ブレヒトが，まさかこの時点で「世界史の脚注」に転落する東ドイツの崩壊を見通していたとはいえないが，例えばシェイクスピアの『コリオレーナス』を改作した『コリオラン』の意図は，「われわれはシェイクスピアをかえられるか？」を問い掛けることによって，彼の時代のアクチュアルな矛盾に迫ろうとしたのではなかろうか。「解決」のテーマに連動するブレヒトの構想は東ドイツの「労働英雄」ハンス・ガルベを視野に取り込むが，劇作家の急死によって未完に終わったことは，いかにも惜しい。

しかし，それにしてもグラスとブレヒトが意外にも多くの接点をもち，あるいはまた，前者が後者から多くのものを学び取ったのではないかと推定される根拠は，じつは「1953年」の物語のなかで言及されている戯曲『平民が叛乱の稽古をする』のモティーフのなかにも歴然と示されている。ここではこれ以上の深入りはできないが，今後の研究に値する興味深いテーマではある。

「1968年」からの抜粋

いずれにしても，わたしはフランクフルトで―当分は―ドイツ文学科と縁を切り，まるでわたしの再度の転向を証明するつもりのように，社会学科に登録した。それで，わたしはハーバマスやアドルノの講義を聴いたのだ。われわれは―わたしは直ぐにSDS（社会主義ドイツ学生連盟）のメンバーになったのだが―もちろんアドルノなんかに発言させなかった。なにしろ彼は，われわれからすれば疑わしい権威の持ち主なのだから。いたる所で，なかでもフランクフルトはとくに激しかったが，学生たちが教官に叛乱を起こして，大学を占拠する事態になった。ところがアドルノは，あの偉大なアドルノは警察の導入もやむなしと判断して，たちまち構内は一掃された。われわれの中でも最たる雄弁家のひとり，その爽やかな弁舌には否定の大家さえも惚れ込んでいたほどだが，それがつまりハンス＝ユルゲン・クラールだった。ちなみに，やつは数年前にはファシストの「ルーデンドルフ連盟」に，その後は反動的な「青年同盟」に所属していたが，今度はすっかり掌のひらを返して，直系のドゥチュケの後継となり，反権力の権威を自称していた。そのクラールが逮捕されたが，しかし数日後にはまた釈放されて，すぐに活動をはじめた。よしんば非常事態法には反対だとか，なんだかだと言って，崇拝する彼の恩師に楯突くにしても。こうして書籍見本市の最終日，9月23日には……ついにアドルノが餌食にされたパネル・ディスカッションは，大混乱のうちに幕を閉じる寸前まで荒れ狂った……。

アドルノの抜群の弟子だと言われたクラールは，大風呂敷をひろげて最後に論敵を手玉に取り，ついそれまで空虚だった概念を極端に突き詰めるやり方がお好みだった。た

しかに反論の言葉も聞かれた。例えば，ハーバマスからは。しかし彼とても，ハノーファーの会議以降，台頭する左翼ファシズムにたえず耳を傾けることには警告していたが，われわれの間では信頼を失っていた。あるいはエス・ペー・デーに身売りしてしまったあの髭面の作家は，われわれに向かって，いまこそ「狂暴な行動主義」を非難したってかまわない，と論じた。会場は荒れた。わたしだって，同じように荒れたのだと思うしかない。それにしても，この超満員の会場から早めに出て行こうと，わたしを突き動かしたのは何なのか。過激な性分が足りなかったせいなのか。片目のために，いつもサングラスを掛けていたクラールの視線に，わたしはもう耐え切れなかったからか。それとも，自尊心を傷つけられたテオドール・W・アドルノがみせた苦悩の姿を，わたしは避けたからではないか。

カルチエ・ラタンに端を発する「68年革命」の運動を，30年後のいま，当然のことながら，冷めた目で，客観的に見直そうとする静かなブームがドイツの社会科学の分野でも進行しているし，例えば週刊誌『シュピーゲル』に連載されていたあるジャーナリストの回顧録(„Baader-Meinhof-Komplex“)がペーパーバックになって発売され，若い世代の関心を惹きつけている。しかし，かつてのブレヒトがそうであったように，「フランクフルト学派」を見つめる「わたし」の，そしてユーモラスな挿入文に登場する「あの髭面の作家」，つまりグラス自身の自虐的な眼差しも，批判的なスタンスを保ちつづけている。かつて『カタリーナ・ブルームの失われた名誉』のために，「左翼テロリズムに加担した」とまで非難を浴びながら，警察権力の抑圧機構にたいする勇気ある抵抗の姿勢をみせたノーベル賞作家ハインリヒ・ベルとの明らかな違いは，重層構造をもつ「1968年」の物語からも読み取れる。一見，過激な学生運動家を思わせる「わたし」は，社会民主党に「身売りした」作家の口を借りてまでも，「狂暴な行動主義」を非難するが，それはまた語り手の「わたし」が拠って立つ地盤をみずから掘り崩す発言でもある。そのアンビバレントな根拠を，「年代記作家」を自認するグラスは，なぜかどこにも提示しようとしない。100話集の「わたし」が原作者との相克をさえも取り込む一例とでもいえようか。

「1989年」からの抜粋

われわれの車がベルリンを離れて，ラウエンブルク地帯(旧東ドイツの国境地帯)にさしかかった時だった。第三放送のチャンネルに合わせていたものだから，カー・ラジオを通して流れてくるニュースがわれわれの耳に届いたのは遅かった。それを聴いたとたん，わたしはうん万人の視聴者と同じように，間違いなく「狂気の沙汰だ！」と，悦び仰天しながら叫んだものだ。「これこそ狂気の沙汰だよ！」それから，運転席でハンドルを握っていたウーテ同様に，わたしも過去と未来に思いを馳せて考えに耽った……。

われわれの方では，すでにこれからの壁のない時代が意識に上っていた。そして—わが家に着くなり—テレビの電源を入れていたころ，壁のあちら側では，まだしばらくもたついていたが，それからやっと，わたしの知人の知人は仕上がったばかりの真新しい

床の上を二，三歩踏み出して，テレビの音量をいっぱいに上げたのだ。その時からは，もうスノー・タイヤの苦労話はひとことも出なかった。こんな問題は新しい時代に，「本物の」お金で解決できないわけがない。せいぜい，あとに残った最後のシュナップスをぐいと飲み干し，わが家を出て，インヴァリーデン通りの方面に向かった。すでにそこには無数の車が，—「ヴァルトブルク」よりもはるかに多くの「トラバント」が—渋滞していて，だれもが国境検問所に殺到していた。みごとに関門は開けっ放しになっていた。聞き耳を立てていると，だれもが，いや，ほとんどだれもが徒歩か，トラビーに乗って西側に出ようと思っていた。「狂気の沙汰だ！」と叫んでいる。しかし，わたしの方はそのあと逃避するように思索に耽っていた……。

あたかもテレビ中継を介して，壁のむこう側のベルリンとベーレンドルフの居住空間を同時並行的に映しだせるかのように構築する虚構性の質について，いまは問わないことにしよう。より大きな問題はしかし，ベルリンの壁の「開放」が，グラスも早くから憂慮していたように，現実にドイツの東部地域に住む人たちの「解放」と同義語になりえたかどうかにある。壁の「開放」から東ドイツ人民議会の総選挙，つまりスターリニズムの国家体制の自己解体にいたる急速な「転換につぐ転換」（ちなみに，これは1995年作の長編『はてしなき荒野』に登場する「パタノスタ」の隠喩でもある）は，1990年10月，西ドイツによる東ドイツの吸収併合という形での「ドイツ再統一」を実現する。

100話集の残り9年は，「わたし」の希望と幻滅をランプのように点滅させる年代記，あるいは現代の寓話におきかえてもよい。結びの「1999年」で，語り手は一変する。いま生きていれば103歳にはなっているはずの亡き母親が，地下の墓場から健康な姿になって甦り，困窮と戦争の時代を生き抜いた過去を語り，そしてバルコニーから下を眺めながら，こんな言葉で閉じている。「あたしだって，2000年を楽しみにしてるのよ。さあ，どうなるかしらね……二度と戦争だけはもうごめんだよ……まずは南のほうで，それからいろんな所で……」。コソボ紛争の憂いは，しかし現実のものとなり，グラスも局外者ではいられなくなる。1999年7月の『ベルリーナー・ツァイトゥング』紙に掲載されたインタビュー記事のなかで，グラスは「誰もこの問題からは，手を汚さずに抜けられない」と指摘したあとで，「地球上の他の国々でも，多くの作家たちが100年を100話で物語る」こんな考え方を受け入れて，協同してほしいという。「例えば，高く評価しているわたしの日本の同僚，大江健三郎が日本の視点から100話を物語るとか，アメリカやスウェーデンでも同じように……。」ボッカチオやダンテなら拍手喝采を送りそうな，いかにもグラスらしい愉快な提案ではあるが。

Günter Grass: Mein Jahrhundert, Steidl Verlag, Göttingen 1999